

セッション事後報告
ホロコースト以降をユダヤ人思想家として生きること
— 『アーレント／ショーレム往復書簡集』を読む —

世話人：橋本紘樹（京都大学非常勤）

報告者：細見和之（京都大学） 大形綾（京都大学博士後期） 関口彩乃（京都大学博士後期） 橋本紘樹

討論者：森川輝一（京都大学）

参加者：25名程度

① セッションの趣旨

本セッションでは、2019年11月に公刊された邦訳『アーレント＝ショーレム往復書簡』（岩波書店）をとりあげ、これまで部分的にしか知られてこなかったハンナ・アーレントとゲルショム・ショーレムの関係に新たな光を当てるべく、訳者4人がテーマ別に報告を行った。

② 報告概要

まず報告者の関口は、ベンヤミンという存在が、アーレントとショーレムの関係にとってどのような意味を持っていたかを明らかにした。1940年の書簡でアーレントにより、ベンヤミンの死が告げられる。彼の死に対する悲しみ、残された遺稿を消滅と忘却から救い出し、世に送り出すための闘いは、アーレントの「シオニズム再考」をめぐる1946年の論争を超えて、1963年のアイヒマン論争による訣別に至るまで2人を深く結びつけていた。対立と訣別が印象的なアーレントとショーレムだが、互いに著作を送り合い、感銘を受け合ってもきた。アーレントが深い共感を示したショーレムの『ユダヤ神秘主義における主潮流』は、ベンヤミンの追憶に捧げられている。2人の関係にベンヤミンが重要な役割を果たし得たのは、ベンヤミンがただお互いにとって大切な友人であっただけでなく、双方の思想を通わせ理解し合うことのできる結節点として立ち現れていたからではないだろうか。

続いて細見が、「シオニズム論争」について報告を行った。1945年に発表されたアーレントの論考「シオニズム再考」は両者の関係に決定的な断絶をもたらした。自らのシオニズム批判を「コミュニストの立場からの威勢のいい新手の批判」と呼ぶショーレムに対して、アーレントは彼の主張の根底に流れている「シオニスト的世界観」を批判する。ショーレムからすれば、パレスチナに敢えて渡った自分が「シオニスト」であることは自明であり、そのこと自体に疑いの目を向けられることはあり得ないことだった。アーレントの応答は、まさにこうしたショーレムの盲点をつくものだった。アーレントの主眼は、「理性的な政治的組織体」の問題にあった。この根本的なすれ違いを顕在化させた両者の激しいやり取りは、のちのアイヒマン裁判をめぐる論争の重要な伏線となっているだけではない。そもそもシオニズムには、19世紀後半からはじまる、ドイツを中心とした青年運動が培ったイデオロギーの一つという側面があり、社会主義、ナチズムもまた、その同じ運動体から生じた側面がある。そう考えると、この「シオニズム論争」は、ユダヤ人が20世紀をどう生きるかという一点では、じつは「アイヒマン論争」よりも遠い射程を有しているということもできるだろう。

橋本が報告するのは、JCR(ユダヤ文化再興財団)における両者の活動である。ナチズムが過ぎ去った後、アーレントとショーレムには、思想上の対立を超え、ユダヤ人の「知識人」として協働して取り組むべき課題があった。ナチスが略奪したユダヤ人文化遺産の取り扱い — 確保、返還、分配 — をめぐる問題である。その目的で設置されたJCRの代表者として、1951年ごろまで、2人は想像もできないほど精力的に活動を行う。荒廃する世界の中でいかにユダヤ文化を継続し、発展させていくか、と

という問いが両者を結びつけていた。さらに興味深いのは、この問題に取り組む中で、アーレントもショーレムがともに戦後社会におけるドイツ人とユダヤ人の関係の構築を模索していた、ということだろう。アドルノやホルクハイマーらが、戦後ドイツで精力的にナチズムの「過去の克服」を訴えかけていたことはよく知られているが、アーレントやショーレムは、いわば裏側から「過去の克服」への寄与を果たしていたのだ。

最後に、大形が「アイヒマン論争」を取り上げた。1963年に『ニューヨーカー』で発表されると同時に大論争へと発展した『エルサレムのアイヒマン』をめぐって、アーレントとショーレムの友情に終止符が打たれた。その書簡のオリジナル・スクリプトは、『アーレント＝ショーレム往復書簡』のなかでは、132・133 書簡として収録されている。本書を通じて、その後も続けられた両者の議論とやりとりの全貌が、初めて明かされることになった。とりわけ、日本でこれまで知られていたショーレムによる「民族の娘」という表現が、もともとの書簡では「民族の構成員」と書かれており、雑誌掲載などの過程で表現が変化していたという事実は特筆すべき点である。書簡全体から読み取れるように、ベンヤミンを忘却の淵から救い出す試みから生まれた2人を結ぶ「細い糸」は、ユダヤ文化遺産の救出という共同作業を通じて、より強くしっかりとした「縄」へと編み上げられた。しかしながら、かつては2人を結びつけた縄も、歳月とともに擦り切れていった、というのもまた事実である。最終的に、忌憚のない議論こそ大切だと考えるショーレムと、人間関係こそ大切だと考えるアーレントの相違は取り返しのつかないものとなっていた。そして、心無いと批判されたアーレントが人間関係を重視しており、ユダヤ人を大事にと語ったショーレムが議論を優先させたことから、アイヒマン論争全体の錯綜ぶりをうかがうことも可能だろう。

③ 討論者からのコメント

討論者である森川先生からは、細見の発表した「シオニズム論争」を中心にコメントを賜った。基本的にはこの論争で、アーレントとショーレムの思想的な接点と相違点がすべて出揃っている。ユダヤ文化の意義を話し合う段階では、両者は見解を共にする。しかし、そこからどのように政治的共同体を形成するかという問題になると、対立が生じてくるのである。政治形態の問題をきっかけにユダヤ性を強調するショーレムに対して、現実にはユダヤ文化を担っていく「理性的な政治的組織体」の実現を重視するアーレントにはリアリスティックな視座があったといえる。こうしたずれ違いは、JCRでの活動や「アイヒマン論争」にも通じている。また、細見の報告にあったように、シオニズムとドイツの青年運動の関係が背後にあることも、ユダヤ人と20世紀の問題を捉える上では欠かせない点である。ただし往復書簡を扱う上では、プライベートな側面を含むテキストをどのように思想的に読み込むことができるか、という問題がついてまわるだろう。この最後の点に関しては、細見の方から、個人が自らの経験を糧にどのように思想を紡いでいったかが思想史にとっても重要ではないか、という応答があった。

④ フロアからの応答

まず、JCRという組織の性質、つまり、どのような政治的なバックグラウンドを持った組織だったのかということに関して質問があった。報告者のうち橋本と細見が、ひとまず文化財の確保を目指し、さまざまなユダヤ人機関の人物が参与した組織であった、と応答した。そして、アーレントは、パレスチナという政治情勢の極めて不安定な地域よりも、ニューヨークのほうが保管・管理に適しているという認識を持っていた、と補足した。質問者からは、そこにアーレントの状況主義的な側面が読み取れる、という示唆的なコメントを頂いた。

続く質問は、ショーレムがアーレントに対して用いたとされてきた「民族の娘」という表現についてであった。オリジナルのテキストには「民族の構成員」と書かれていて、当時雑誌に掲載される際に表記の変更があったのだが、その経緯を大形が説明した。ほかにも、アーレントのユダヤ人理解やシオニズム理解について質問が寄せられた。

そして、徳永恂先生から貴重なご意見を賜った。往復書簡は歴史や思想を知る上で貴重なものであるものの、あくまでサイドストーリーであり、「ホロコースト以降を生きる」という問題設定を考えると、「友情」というレベルでは語りきれないものがあるのではないだろうか。そして、その問題は現在に至るまで続くものであり、決して解決されていない。ホロコースト以降の世界では、いかに生きのびていくかが切実な課題であり、生きるために必要な悪は肯定されるしかなかった。思想がどのようにそうした問題に取り組んでいけるかは、今後も課題として残り続けるだろう。徳永先生の発言の趣旨はそうしたものだ。

フロアとの質疑応答は活況を呈し、非常に有意義なものとなった。あらためて感謝を申し上げたい。

(文責：橋本)